

景清
護身

川崎観音

(音羽)
観音

由来記

当観世音は平安時代末期(一一八三年頃)

平家の武士悪七兵衛平の景清が兜の八幡座

に載き数多の戦陣を駆け巡るも観音加護に

より身に寸傷も受けなかつたという御身丈

一寸八分(五・七cm)の十一面観世音菩薩

である。景清は源平合戦の折平氏が屋島の

戦に敗れ一門と共に軍船で西海に下る折遇

々暴風雨にあい黒髪島裏に避難したが景清

は早く西海に下り再起を計らんと思ひ此の

暴風雨を静め給えと観世音に念ずれば観世

音夢枕に立たれ「我を向うの山にある寺門

に安置すれば風雨静まらん」と景清是を信

じて疑がわず直ちに对岸の寺門に安置すれ

ば風雨立ち所に静まり無事西海檀ノ浦さし

て下向するを得たという。景清は平家滅亡

後も生永らえ源氏に一矢を報いんと計るも

目疾をえて果し得ず絶食して生を絶つたと

いわれている。爾来この観世音を念ずれば

必ず応益あり特に安産、眼病、肢体不自由

に靈驗あり初めは常に閉扉されていたが後

世に至り十二年に一度(子年)開扉され尊

像の拝観が出来事となり地名を取つて音

羽の観音様として尊駕されていたが後年川

崎観音といわれて現在に至っている。

当国十八番 霊峯山 川崎観音堂